

亡者の出会い

大雲取越のこの部分は「亡者の出会い」と呼ばれています。この道を歩いていると、向かい側からやってくる亡くなった友人や肉親に出会うことがあると伝えられています。

死者の国「黄泉」

熊野は古くから死後の世界と関連付けられています。『日本書紀』という 8 世紀の年代記では、熊野はイザナミノミコトという神が葬られた地であり、また、その夫であるイザナギノミコトが彼女を追って亡者が住まう黄泉の国へ向かった地です。

山々もまた、古くからこの世とあの世の境目が曖昧になる場所とみなされてきました。仏教が伝来し、山の上に墓地がつくられるようになると、この見方はさらに強まりました。熊野では、妙法山阿弥陀寺は死後の世界に向かう旅と密接に関連付けられています。日本で亡くなる人は皆、冥土に向かう前にこの寺を訪れると言われています。

亡者と出会う

「亡者の出会い」で死者と遭遇した話にはあるパターンが見られます。舟見峠を越えて、無事なだらかな道（この場所のこと）まで下ってきた巡礼者は、気楽な気分になりはじめます。風が変わり、あるいは霧が立ちこめ、道のはるか向こうから誰かがこちらに歩いてくるのが見えます。その人影が近づいてくると、それは亡くなった友人や親族であることがわかります。しかし、巡礼者が挨拶したり話しかけたりしようとすると、その人は姿を消してしまいます。

いくつかの話では、巡礼者はこの場所で会ったのは生きている人だと考えます。しかし、家に帰った時、ここで会った人は当時すでに亡くなっていたことを知ります。実は、巡礼者が出会ったのは、あの世に行く前に鐘を撞くため阿弥陀寺に向かっていたその人の魂だったのです。